【ポスターセッション】

災害ソーシャルワーク試論

－被災地を支援するための枠組みの考察－

○　白鷺病院　　藤田　譲（1508）

キーワード：災害ソーシャルワーク　被災地支援　後方支援

１．研 究 目 的

阪神淡路大震災をきっかけに、日本のソーシャルワークにおいても災害時の支援活動が行われるようになった。また、その成果や課題についても、さまざまな場で報告がなされている。その多くは業務や専門職団体の正規な活動としてではなく、専門職有志によるボランタリーな活動であったり、市民ボランティアであったりであった。さらに、支援活動の多くは「被災地での支援活動」であったため、東日本大震災のように被災地域が広範な災害ではさまざまな課題も提起されるようになった。

本報告では、東日本大震災における災害支援活動や報告者自身の経験を基に、大規模災害においてソーシャルワークを効果的に展開するために、災害ソーシャルワークの枠組みを具体的な活動内容とともに検討する。

２．研究の視点および方法

災害ソーシャルワークは、地域社会が大きく破壊され被災地の資源だけでは対応困難な状況において、マクロ・メゾ・ミクロの各レベルで展開されるものと位置づけられる。この前提において、報告者自身の経験を加味することで災害支援活動を検討してみて、ソーシャルワーク実践の要素を抽出し、展開する拠点・支援の標的を軸にして災害支援活動をひとつの枠組みに整理してみた。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に準拠する。

４．結果～災害ソーシャルワークの枠組み

（１）被災地で働くソーシャルワーカー（ＳＷ）による現地支援活動

１）所属機関での業務

入院患者や入所者の安全確保／地域で暮らす利用者、職員の安否確認／医療・介護の継続（避難先・転院先確保も含む）など

２）地域での活動

関係機関のバックアップ／行政からの支援要請への対応／ＳＷ仲間、職能団体内での支えあい／被災した地域住民への支援

以上に加えて「ＳＷ自身の生活の安定化」も図る必要がある。被災地ではＳＷ自身も被災者であり、私生活において災害の影響を受けている。発生初期はやむを得ないが、外部

からの救援が入るとともに被災したＳＷの健康管理も重要な課題となる。

（２）被災地外のＳＷによる現地支援活動

１）被災地の機関、施設での応援

被災地の機関におけるソーシャルワーク部門のバックアップ／被災地内の避難者への対応／復旧作業の応援

２）地域機能の補完

災害にともなうソーシャルワーク・ニーズのリサーチ／避難所、自宅生活者へのアウトリーチ／相談機関の立ち上げ

３）被災地のＳＷ等専門職、施設、行政機関との連携

「被災地域での活動」における協働体制の構築

（３）「被災地での活動」を支える後方支援活動

１）被災地の状況についての情報収集とアセスメント

現地状況の情報収集と安全確保／支援活動内容の検討と見直し／活動経験者からの報告取りまとめ

２）要員の派遣

要員募集／現地拠点とのコーディネート／要員への派遣前オリエンテーション／活動後のフォローアップ

３）上記にともなう事務作業

（４）１～３を支えるための活動

１）支援活動全体のコーディネート・統括

被災地の行政機関、関係機関とのネゴシエーション／支援活動の枠組み作り／現地要員へのスーパービジョン

２）活動基盤の整備

活動拠点の整備／資金・物資の調達／バックアップ・補給機能の確立

３）広報活動

活動報告の取りまとめ／要員と資金の継続確保のためのＰＲ活動・情報発信

５．考 察

４で紹介した内容は、相互に補完・協働して展開されるもので、そのためには関わるＳＷの広域ネットワークの構築が必要となる。しかし、一方では災害支援にともなう困難さ、例えば「知らない者同士」による連携・協働、「被災地のＳＷ（支援する側）」は「被災者（支援を受ける側）」でもあるという二面性、「被災地」と「被災地外」という、置かれている状況の違い、地域の文化・人々の気質の違い「日常生活」とのバランス、「災害そのものの経験」「災害支援の経験」による差異が加わって、より複雑さを増すように思われる。

したがって、災害支援の経験を広く共有するとともに、経験知を蓄積していくことで災害ソーシャルワークの確立を目指していくことが大きな課題であろう。